

2013年度
第2回 琵琶湖博物館協議会

日 時 2014年3月6日(木)

14時00分～16時30分

場 所 滋賀県立琵琶湖博物館1階セミナー室

会 議 次 第

1 開 会

2 議 事

(1) 新琵琶湖博物館の創造(リニューアル)について

(2) 琵琶湖博物館中長期基本計画2013年度行動計画の実績・評価
および2014年度行動計画について

3 その他

4 閉 会

[14時00分 開会]

1 開会

○司会（中鹿副館長）：お待たせいたしました。定刻となりましたので、ただいまから、平成25年度、第2回となります琵琶湖博物館協議会を開催させていただきます。

本日、進行を担当いたします当館の副館長の中鹿でございます。どうぞよろしくお願い致します。

会議に入ります前に、お願いを申し上げます。

県では、協議会等の会議につきましては、公開を原則といたしております。本日の会議におきましても公開で実施するというにしておりますので、ご了承をお願いいたします。

また、当協議会の定足数は、「委員の半数以上」となっております。本日は2名の委員の方がご欠席でございます。委員15名中13名の委員さんが出席ということでございますので、会議は成立していることをご報告いたします。

それでは、開会に当たりまして、篠原館長よりご挨拶を申し上げます。

○篠原館長：皆さん、こんにちは。

きょうは、琵琶湖博物館協議会を開催することになりましたけれども、皆さん、大変お忙しいところ、ご出席ありがとうございました。

この間も、ことは少し入館者数も横ばい状態になりそうで、大幅な減少ということではなく終わりそうなんですけれども、これも皆さんが、いつもどおりの組織のあり方、運営のあり方についての議論をしていただきまして、それを十分に我々のほうも考えて、努力してきた結果であろうかというふうに自負しております。

ことしのこの協議会の最大の問題はやはり、きょう、資料をお配りしましたけれども、開館以来17年を経過して、さまざまな価値観やそういったものが変わってきておりますが、何よりも17年を経過して、我々の博物館の研究蓄積が大変大きなものになってきていて、博物館は10年か20年目に大体リニューアルするものですが、平成28年（2016年）の開館20周年を目指して、「新琵琶湖博物館の創造」ということで、この2年ほど必至に取り組んできましたけれども、やっと本日、まだ正式に県議会を通過しているわけじゃありませんけれども、「新琵琶湖博物館創造基本計画案」というものを、きょう、お配りすることができましたし、それからきょうはもう一つ、中

長期の基本計画も定まりましたので、それもお見せすることができるようになりました。

この2つは深く関連しているものでありますけれども、これに目を通していただきまして、より有意義なリニューアルに向けての議論をしていただければ、我々としては大変ありがたいというふうに思っておりますので、どうぞきょう一日、よろしくお願ひしたいと思ひます。

2 議 事

○司会（中鹿副館長）：それでは、早速、議事に入らせていただきます。

これからの議事進行につきましては、当協議会の市川会長に議長をお願いすることといたしたいと思ひます。

市川会長、どうぞよろしくお願ひします。

（1）新琵琶湖博物館の創造（リニューアル）について

○市川会長：それでは、最初の議事に入らせていただきます。

新琵琶湖博物館の創造（リニューアル）について、事務局から説明をお願いします。

○事務局（藤村課長）：準備室の藤村と申します。よろしくお願ひします。

座って説明をさせていただきます。

「新琵琶湖博物館創造基本計画案」でございます。前回、11月の博物館協議会では、中間取りまとめという形でご提示をしたものを、その後、検討を行い、今回、基本計画案という形で取りまとめたものです。

資料としては3種類ありまして、基本計画案の本編とその概要案、そして一番分厚いのが本編の資料編、この3つになります。

説明のほうは、分厚くないほうのホチキスどめ、基本計画案のほうでさせていただきますと思ひます。

それでは、この基本計画案の1ページからでございますが、1ページと2ページにかけては、基本計画策定に当たっての配慮、リニューアルが求められる社会的背景や、新しい博物館に求められる役割などが書かれております。

2ページの上から5行目以降に書かれているんですが、「湖と人間」のあり方を県民とともに考え、ともに行動し、人づくりに貢献する博物館として、過去・現在・未来を

とらえ直し、「湖と人間」のあり方を新しい常設展示で提示していく必要があり、また交流の場としての博物館から、地域での実践・行動を担う人が育つ博物館へと進化をしていくことが必要であるというように考えております。

2ページの下から4行目に書かれておりますが、琵琶湖博物館が環境先進地域「関西」をリードする環境学習と情報の収集・発信の拠点として、また研究・交流のネットワーク施設として使命を果たし、より多くの人々に博物館を利用していただくことを目指して、この基本計画を策定するものでございます。

それでは、4ページをお願いいたします。

4ページから、琵琶湖博物館17年の実績と課題が整理をされています。中間取りまとめでも実績と課題、これは整理をいたしました。今回は写真も交えて、見やすく整理をしております。

まず研究・調査、展示、交流、資料整備という博物館がより基礎的機能について実績をまとめ、その後6ページ以降、博物館の持つ多面的機能として、環境学習・生涯学習の拠点、文化・観光の拠点、国際研究・交流の拠点としての実績をまとめております。

そして、7ページからこれまでの取り組みを通じて見えてきた課題を整理しました。

まず来館者数が減少してきていると。そして、マーケット調査から見えてきた課題として、昨年度、ビジョンを策定したときに整理をした課題とターゲット層を次の8ページにわたり記述をしております。

そして、常設展示の情報発信力が時代の流れとともに低下をしてきたこと。9ページでは、人が育つ博物館として、持続可能な社会づくりに向けて、主体的に実践する人を育む環境学習の拠点となる必要があつて、先ほど言いましたが、「交流の場」としての博物館から地域での実践を担う、「人が育つ博物館」へと進化をしていく必要性について記述をしております。

また、時代が高度成長から生活の質を重視する成熟の時代へと転換してきたことによる、博物館に対する新たな利用ニーズ、例えば高齢者の癒やしの場、高齢者と子どもたちの交流の場といった、新たな活用について提示していく必要性についても書いております。

今回は、この本編に加えまして、資料編も整理をいたしました。一番分厚いものですが、この資料編の1ページから17ページにかけて、本編で書かれております実績につ

いて、詳しいデータを挙げております。研究からスタートして、各種展示、資料の収集、そして交流活動、どういうことをやってきたということをこの資料編で整理をいたしました。時間の関係がありますので、資料編の詳しい説明は省略をさせていただきます。

そして、本編のほうの10ページからですが、リニューアルの方向性が示されております。

これにつきましても、中間取りまとめで提示をさせていただいたものを、今回、2ページで整理をいたしました。琵琶湖博物館はリニューアルでこんな博物館を目指しますとして、1点目に、「湖と人間」のあり方を県民とともに考え、ともに行動する博物館。

2点目、次代を担う人が育つ博物館。

3点目、地域活性化の核となる博物館の3点を挙げています。

そして、博物館活動の根幹となる研究・調査の方向性を示し、11ページでリニューアルの方向性として、これまで整理をしてきました2つのコンセプト、これに加えて、子どもも大人も高齢者も、年齢や関心が異なるさまざまな利用者がそれぞれに合った楽しみ方ができる空間を目指していきたいと考えております。

12ページからは、展示交流空間の再構築で、今回のリニューアルのメインとなってくるものです。この部分は、中間取りまとめと比べまして大きく進んだところで、資料編も含めると、かなりのボリュームになっております。

12ページには、新展示の考え方と特徴が書かれております。中間取りまとめでも新展示の考え方については若干触れておりました。「湖と人間」の未来を考えることができる展示とするということです。現在の私たちの環境や暮らしをとらえ直すために、3つの異なる時間スケールを設定します。

まずA展示室では、数百万年から数十万年という非常に長い時間スケールにより、そうした長い時間に立って初めて見えてくる自然の変化やつながりを見せていきます。

B展示室は、人が琵琶湖で暮らすようになった1万数千年から数百年という時間スケールで、身近な自然の変化や人々のかかわりの歴史を扱います。

C展示室、水族展示室では、数十年という短い時間スケールの中で、特に高度経済成長以降に起こった重要な変化を紹介することで、現在をとらえ直し、未来を考える展示といたします。

新しい展示では、過去と現在、展示内容と来館者との「つながり」を伝えることに重

点を置き、さまざまな環境・生き物・人間活動の関係性をわかりやすく展示し、自分とのかかわりに気づくことができる展示としたいと思っています。

これまで一般的な博物館展示は、歴史イコール過去というふうにとらえることが多かったわけですが、新しい展示では、歴史を「いま」と「未来」を考える手がかりということで位置づけ、「いま」の視点を持ちながら、歴史を見直し、「湖と人間」の未来を考える展示とします。3つの異なる時間スケールで、「いま」を理解することによって、環境や暮らしは一定のものではなく、過去から未来に向かって変化し続けるということを伝えたいと思います。

13ページは、新しい展示手法でございますが、各展示室の中央部に交流スポットを設け、博物館スタッフと地域の人々や来館者との交流を促進したいというように思っております。

また、地域の人々がつくる展示コーナーや新しい情報をタイムリーに伝えることができる可変式の展示ボックス、ここではびわはくボックスと言っておりますが、そうしたものを設置をしていくということで、さまざまな新しいトピックを発信していきます。

さらに、ICT（情報通信技術）を活用し、フィールドと展示をつないで、来館者が最新のフィールド情報に触れることができる展示とします。

次の14ページからは、各展示室の内容です。

まずA展示室ですが、15ページにゾーニングのイメージ図が書かれております。現在のA展示室は長い時間を扱っておりますが、時間スケールが余りにも長いために、過去に起こった出来事と現在の暮らしのかかわりが意識しにくいという展示になっております。

現在の展示は、古い時代から新しい時代に向かって、時代ごとに地形、湖、気候、生き物の移り変わりを包括的に紹介をしておりますが、新しい展示では、まず現在を入りに、そして古い時代へとさかのぼることで、過去から未来へつながる現在を考えるものにしたいというように考えております。

また、地形と湖、気候と森、生き物の変化を個別のコーナーとして紹介をし、現在とは大きく異なる環境であった過去を伝え、その変化が現在の環境をつくる要素となっていて、さらには未来へも続いているということを知ってもらう展示としたいと思います。

ゾーニング図でいきますと、まず1の導入部、「いまの琵琶湖と生き物」から入って、

次に中央部2の「琵琶湖と生き物のものがたり」のコーナーに進んでいきます。ここは過去の琵琶湖と生き物の姿を映像で紹介するコーナーで、A展示室で紹介する展示内容の概要をここで示して、各コーナーへと進んでいくという、こういうつくりになります。

3の「変わる大地と湖」は、私たちの暮らしの時間では何も変化をしていないように見える琵琶湖の環境や地形ですが、これまで長い時間をかけてダイナミックに変化してきたこと、そしてこれからも変化し続けること、こうした変化は自然災害に結びつく地球の運動によるものであるといったことを紹介していきます。

そして、4の「変わる気候と森」のコーナーに進んでいきます。数万年以上の長い時間スケールでは、地球規模の気候変動とそれに影響を受けた動植物の変化が琵琶湖地域においても見られております。ここでは、現在の琵琶湖環境という側面から、琵琶湖地域の気候の変化や、その影響としてあらわれた森林環境の変化を紹介します。

14ページの上のほうにイラストが3つあって、その左上、琵琶湖地域の氷河期（氷期）の気温を体感するコーナー、冬ではマイナス13度であったという、そうした体感コーナーも設置をする予定です。

そして、ゾーニング図では5のほうに進んで、「変わる生き物」のコーナーになります。現在の琵琶湖やその周辺の生き物は、ごく最近持ってこられたものであったり、移入してきたものを除いて、非常に長い時間の中で進化をし、絶滅もし、現在も琵琶湖の固有種として生き残っているものが多く存在しています。このような琵琶湖やその周辺に生息する動物の起源や進化と絶滅のドラマをここでは紹介をしていきます。

そして、最後に6の結び、「琵琶湖と生き物の歴史からみた人」ということで、長期的な自然の営みの中で見た生き物としてのヒトを、今回初めてこのA展示室に登場させることによって、「湖と人間」の関係について考えてもらい、次のB展示室への導入としていきます。

次に16ページ、B展示室です。

現在のB展示室は、人と琵琶湖の歴史をテーマに、時代区分を厳密に明示をせず、政治史的視点や社会・経済史的な観点をできるだけ取り上げない形で、縄文・弥生時代のなりわい、交通、漁撈、治水・利水の各テーマについて展示をしております、人間活動に重点を置いた展示となっております。

新しい展示では、現在の視点のテーマは継承いたしますが、琵琶湖博物館の環境史研

究の成果を踏まえまして、自然そのもののあり方と人間活動のかかわり、特に人間の自然認識や自然観、生き物観の変遷、そして自然に対する働きかけのあり方の変化に軸を置いた展示としていきたいと思ひます。

この新しい展示テーマは、16ページの四角で囲んでいるところに、「身近な自然と暮らしの歴史～見えない未来が見えてくる～」というふうに書いてありますが、「いま」とは全く異なる自然のとらえ方があったことを紹介することによって、現在と未来を考える環境学習にも使える展示というふうにしていきたいと思ひます。

17ページのゾーニング図ですが、まず1の導入として、「琵琶湖地域のいま」があります。今の琵琶湖から出発して、展示室を観覧後、また最後にこの導入部分に戻るといふ構成になっております。現在に残る伝統的な要素を抜き出して展示をし、一見、伝統とは思えない今の暮らしや文化が、実は過去とつながっているということをご紹介します。

次に、2の「変わる自然、変わる暮らし」に進みます。ここでは、約1万年の間の森の変化を紹介しまして、琵琶湖周辺の環境変化の中で人々がどのような暮らしを営んで、その暮らしぶりを変えたかということをご、主に縄文時代の人々の食生活に関する研究成果から展示をしていきます。また、琵琶湖湖底堆積物の花粉化石の分析から得られました森の変遷、こうしたものを中心に、過去2万年程度の時間スケールで見た「湖と人間」のあり方を考えてもらふ展示とします。

次の3の「人がつくった自然」では、およそ二、三千年前に始まった水田稲作による自然や暮らしの変化や、人々の自然観を紹介します。また、自然から影響を受けていた縄文時代とは異なりまして、弥生時代以降の人口増加や技術革新に伴う自然への圧力の増加による自然環境の変化を、人間による森林資源の利用による二次林化であったり、はげ山化、また調和をもって維持をされていたと言われる里山などについて紹介をし、現在の森林問題を考える入り口とします。

4の「殺生をめぐる葛藤」に進みます。およそ1000年前に不殺生を戒律とする仏教の思想が社会的に受容をされていく中、自然のとらえ方、特に漁撈を中心とした生き物とのかかわりがどう変化し、現在の文化がいかに成立をしてきたかを展示します。16ページの一番下のイラストにありますご、当時、信仰の場であったばかりでなく、教育の場でもあったと言われる村のお堂を復元して、そこで絵巻物などの解説を受ける絵

解き体験ができるような交流スポットも設けます。

そして、5の「船とともにある暮らし」のコーナーに進んで、400年前から記録に登場する丸子船を展示し、琵琶湖集水域の暮らしが船とともにあったということを紹介し、6の「自然へのまなざし」に進みます。

地形や生き物などへの観察力が高まって、自然認識が深まっていく様子、そしてヨーロッパからこれまでは全くなかった異なる自然認識、近代主義的な自然認識が入ってきて、琵琶湖地域の人々もそうした影響を受け、自然への認識が深まっていく様子を紹介し、もう一度入り口の導入に戻って、最後はフィールドへのいざないとなるよう、県内の歴史系博物館の企画展示なんかの紹介もここでしたいと思います。

次に18ページ、C展示室でございますが、現在のC展示は昭和30年代という少し前の昔を展示することで、現在と対比をしてもらおうという手法をとっております。この少し前の昔を経験している世代が少なくなってきたということから、来館者が琵琶湖地域で現在目にする風景を通じて自分を取り巻く環境について発見をしたり、考えを深めたりできるようなヒントを提示します。

19ページにゾーニング図がありますが、まず1の導入として、「琵琶湖へ出かけよう」というのがあります。ここでは琵琶湖の全体像を紹介します。琵琶湖をほとんど知らない人にはその特徴的な魅力を伝え、フィールドへのいざないであったり、観光への入り口の役割を果たします。また、より深く知りたいという人には、そういった詳しい情報を提供します。

そして、現在の展示室とは逆回りで、上のほうの2の「ヨシ原を歩いてみると」に進みます。琵琶湖の代表的な景観であるヨシを取り上げ、ヨシ原の中に入ったときに見える世界、生き物たちがどのように暮らしているかを伝えます。また、周辺の湿地帯の変遷と私たちの暮らしの関係もここでは紹介をします。

そして、3の「田んぼをのぞいてみると」のコーナーへ進みます。滋賀県の代表的な景観の一つである水田の生物と人間のかかわり、そして新たに取り組まれている「魚のゆりかご水田」などによって見えてくる人間と自然の関係を紹介します。

次に、4の「川から森へ」と進んで、琵琶湖地域の中上流部の環境と、琵琶湖とそこにすむ生き物と人との関係性を示します。

そして、5の「私たちの暮らし」では、昭和30年代の暮らしを再現した富江家の展

示から、現在の私たちの暮らし、50年後の私たちの暮らしを考え、現在も残っている資源利用の知恵を紹介します。

そして、中央ですが、6番目の「生き物コレクション」では、琵琶湖とその集水域に生息する生き物を実物標本を使って展示をしていくということで、美しさと多様さを一目で感じられる空間をここでは演出をしたいと思います。

最後、7番目は「これからの琵琶湖」ということで、来館者が最新の情報を得られるコーナーということでしていきたいと思っております。

そして、次に20ページ、水族展示ですが、これまで水族展示は魚を中心に見せてきておりましたが、新しい展示では、生息環境に近い形で、生き生きとした魚を見せていきたいということで、時には魚の産卵行動なんかも紹介をしたいと思います。さらに、琵琶湖の生き物と漁業、食文化など、人とのかかわりをわかりやすく展示をしていきたいということで、暮らしとのかかわりを紹介します。

特に、このゾーニング図でいきますと、3の「川の生き物とその環境」の部分ですが、これは20ページのイラストの左上に書いていますけども、川を遡上するアユと、それを漁獲するカトリヤナを再現して、ヤナを上がろうとするアユの行動を見せるような展示であったり、またゾーニング図の6番目、「古代湖の世界」がありますが、400万年という世界有数の長い歴史を持つ琵琶湖をより理解していただくために、世界一古い歴史を持つロシアのバイカル湖等の固有種を紹介して、琵琶湖が世界でも数少ない古代湖であるという、そういった特徴を紹介します。

最後に9番目で、「マイクロアクアリウム～琵琶湖の生態系を支える小さな生き物たち～」ということで、琵琶湖の生態系を根底で支える目では見えないプランクトンなど、そうした生き物を顕微鏡であったり、映像で紹介するコーナーを設けたいと思います。

次に、22ページから交流空間・交流機能の整備ということで、大人の興味や探求心に応じて、交流もできる大人のディスカバリーを整備したいと思います。また、家族やカップル、シニアの方など、個人や小グループで来館をしても楽しく参加できるわくわく体験スペースをつくって、多様なプログラムを提供します。

23ページにあります、レストラン・ショップのアミューズメント機能を強化して、ここでしか食べられない、買えないといった、琵琶湖博物館ならではのレストラン・ショップとしていきたいと思っております。また、樹冠トレイルを整備いたしまして、琵琶湖と

の一体感を感じられるような、そうした屋外空間も整備をします。

24ページからは交流機能、ソフト的な部分ですが、見える、伝わる、広がる参加と交流を推進していくということで、博物館の展示や資料を使った環境学習プログラムを企画・開発し、フィールドの楽しみ方や発見することのおもしろさを伝えていきたいと思いをします。

こうした内容を資料編には詳しく整理をしております。

次の26ページからですが、利用者の利便性・快適性を高める施設整備ということで、ICT（情報通信技術）を活用した誰もが参加しやすい体験と交流が促進される環境を整備していくということで、案内情報ディスプレイであったり、そうしたものも整備をしていきたいと思いをしますし、資料検索システムや複数言語による展示ガイドシステム、こうしたものもつくってきたいなと思いをします。

そして、27ページ、ユニバーサルデザインの推進です。

多様な人が訪れる施設として、ユニバーサルデザインの考え方に基づく施設の整備、危機管理、来館者対応、展示交流を進めます。車椅子の方や子どもたちが見やすい高さに設置された展示、わかりやすい動線、段差の改善など、より快適で、安全に移動できる空間づくりを行います。また、整備に当たっては、障害のある方や子育て中の方など、多様な人々が参加するワークショップを開催し、使い勝手のよさなどを検証していきます。

このICTとユニバーサルデザインについても、資料編には詳しく記述をされております。

次に、28ページの多様な主体との連携ですが、地域との連携については、これまで築いてきたネットワークを活用して、体験・学習プログラムなんかも推進をしていきたいと思いをしますし、学校との連携も重要であると考えております。小中学校の教員を中心とした人たちとのネットワークを構築して、博物館利用を促進したいなと思っております。また、関係団体との連携としては、他の博物館と協働事業をしたり、相互訪問ツアーといった、こうした取り組みも行っていきたいと思いをします。さらに、企業、大学と連携を深めて、企業のCSR活動との連携、また大学とのパートナーシップ協定等によって、博物館利用を促進していきたいなと思っております。

次に、30ページ、効果的な広報・営業活動の推進ですが、これにつきましても中間

取りまとめではお話しをしております。博物館の存在や活動、魅力が広く伝わるよう、観光団体や旅行社などの連携を強化し、幅広い来館者や博物館ファンの獲得を目指して、広報・営業活動を強化していきたいと思っております。

最後に、32ページ以降に、事業規模、スケジュール、期待される効果が記述をされております。今回、リニューアルは段階的に施工していきたいと思っております。

第1段階が、開館20周年である平成28年に第1期のリニューアルがオープンし、その後、第2期、第3期というような形で、段階的に取り組んでいきたいと思っております。まずは水族展示とC展示を行いたいと考えております。

そうしたことによって、来館者数の予測でございますが、最終の平成32年度は58万5,000人という、そうした数字を予測しております。また、経済波及効果もあるということで、県のツールを利用した総合効果をこちらに挙げております。

それ以上に、34ページ、35ページにあります。社会・文化的な効果、心に「種」を、「苗」を育てる。そして、地域に根差した木々をつなぎ、発展し続ける「森」へということで、この基本計画のタイトルにもあります『湖をめぐる博物館の「森」構想～博物館の「木」から地域の「森」へ～』ということで、今回、リニューアルを通じて、「湖と人間」の新しい共存関係が形成された地域社会の実現を目指していきたいというように考えております。

以上でございます。

○市川会長：はい、ありがとうございます。やっと具体案が出てきて、具体案について議論できそうですね。

それでは、「新琵琶湖博物館の創造」について議論を進めてまいりたいと思っております。

まず橋詰委員さんからご意見がおりということなので、まず橋詰さんからお願いします。

○橋詰委員：大層なことではないんですけども、ちょっとこの委員会でなかなかうまいぐあいに発言ができなくて、ちょこちょこメモを渡したりしていたんですけど、しっかり話せということで、今、お時間を少しください。

細かいことなんですけども、今回いただいた計画案を見て、本当にイメージが広がって、とても楽しみだなと思っています。そして、私が思っていたことの大部分がここに反映されていて、本当は言うことはないんですけども、あえてちょっとだけ言わせて

いただきます。

1つは、資料の中にもございましたけども、湖畔の立地条件や屋外展示なんかがなかなか利用されていないというのがありました。私、ここの博物館に入って、まず目に入る大きな窓がとてもすばらしいなと思っていて、それも一つの展示と考えたときに、ふっと思ったんですけども、屋外の景色自体を例えば一般の方に絵で描いてもらうとか、普通、皆さん、来たときには、そのときの景色しか見えないんですけども、四季によって変わっていくだろうし、時間によって湖の色も空も変わって、本当に美しい景色だなと思うので、子どもたちのいろんなフィールドから持ってきた宝物を展示するという内容もこの中に盛り込んでありましたが、大人たちも、また子どもも、例えば絵画なんかでいろいろじっくりと、この烏丸半島から見た景色を写真で撮ったり、絵画であらわしたりしたものを展示する場所があってもいいのかなと思いました。それが参加する展示の一つになるんじゃないかなと思っています。

参加する展示の中で、大学生にも活用してもらうということがあったと思うんですけど、例えば写真や絵なんかで、芸術面から入ってきた人がいたとして、滋賀県は中学生でよく職業体験をやっていると思うんですけども、大学生にも実際に職業体験という形でやっていただくというのは、ちょっと楽しいんじゃないかなと。もし場所があれば、大学での研究の発表を大学内ではなくて、ここでしてもらうということで、またちょっとみんなに展示の一部として活用してもらいつつ、こちらも楽しめるんじゃないかなと思いました。

もう一つ、ユニバーサルデザインの充実というのがこの中にもあったと思うんですけども、外国人の方への対応ということを考えたときに、例えば観光客の方もいらっしゃると思うんですけども、滋賀県は外国の方でお住まいになる方がたくさんふえています。その方たちにもっともっと利用していただける方法はないのかなと思っているんですけども、これはちょっとあれなんですけど、赤ちゃんが生まれたときに、ブックファーストといって、絵本をプレゼントするという企画がありますが、滋賀県ファーストじゃないですけども、滋賀県に来てくださった方、外国の方も含めて、新しくこちらに入ってきてくださった方に、例えば滋賀県のことを知ってもらうという意味で、割引券なり、ここにまず一回来てもらって、滋賀県というものを知ってもらう窓口を何かつけれないかなと思いました。

あと、ばらばらといろいろ言いますが、すみません。レストランについて、いろいろオリジナルのメニューだとか、ショップもそうなんですけど、オリジナルのものをというふうに書いてあったのを見て、すごい楽しみだなと思っているんですけども、アンケートの関心の中にも、2番目でしたか、高い関心を持つレストランなんですけど、もう一度来たいというほかに、もっといたい、もっと長いこと、ここにいたいという人にとったら、レストランというのは不可欠だと思います。レストラン自体も不可欠なんですけども、子どもが小さかったり、ちょっと高かったり、狭かったりすると、長居はできませんし、その点、野外でいろいろ展開して下さると、うれしいなと思いました。できたら、私の小さな提案なんですけど、レストランもちょっと楽しいことをいろいろ考えてほしいなと思っているんです。例えばオムライスを全部食べたら、お皿のところにナマズの絵があって、ちょっとナマズについて書いてあるとか、箸袋のところに展示の説明がちょっと書いてあるとか、そういうことがあると、もしかしたら、その箸袋を集めてくれる子がいるんじゃないかなと思ったり、そういうちょっとおもしろ味のある企画ができないかなと思って、前の委員会の後に楠岡さんにいろいろお伺いしていたんですけども、直営でないので、意見が反映されるというのが少し難しいところがあるというふうにお伺いしました。例えば月に1回とか、話し合い、打ち合わせの機会を今も持たれているということをお伺いしたんですが、そこに滋賀県の食について頑張っておられる例えばNPOの食育を進めておられる方に、その打ち合わせに入っていただくとかということで、また違う意見の反映の仕方ができるんじゃないかなと思いました。

最後に、私もそうなんですけども、小さな博物館が併設されているところに、今、勤めていまして、展示を少しずつ変えたいと思っても、なかなかそれがうまくいかない。それにはやっぱり幾つかハードルがあるんですけど、メンテが難しかったりとか、変えるということが難しい展示の仕方とかがあったりするんですね。だから、それについて可変性のある展示というふうに書いてありましたが、変えることが容易である展示の仕方をしていただけることで、もっとハードルが低くなるんじゃないかなと思います。

もう一つ、できたらお願いしたいんですけども、お客さんとして、例えばきょう来た方は、きのうあった展示がきょう変わっていることはご存じないですし、1カ月後にまたこの展示がプチリニューアルするんだよということがわからないと思うんですね。だから、この展示はちょくちょく変わっていますよということをその場でわかるように

していただけると、あっ、これ変わるんだなと。次また、季節が変わったら、違う展示になっているのかもしれないなということがわかっていただけるような工夫があればなと思います。

それと、その場にある展示の内容について、もっと詳しく深く知りたいと思った方のために、学習会とか、講座とかのご案内をその場に置いておいていただくということも展示の一部というか、情報としてあれば、うれしいなと思います。

それと、ちょっと戻りますが、ユニバーサルデザインということが今の展示の話の中にあるんですけど、私、最近、とても老眼が激しくて、小さい字がなかなか見えなくて、フォントの種類にもすごく左右されますし、私は背が低いので、パネルがちょっと上のほうにあると、それがまた見にくかったりします。だから、障害を持った方だけでなく、少しパネルの位置を工夫していただくということだったり、フォントを選んでいただくということだけで、随分読みやすくなったり、読む気がしたりということがフォローされるのではないかなと思いました。

すみません。細かいことで申しわけありません。

○市川会長：ありがとうございました。

具体的なリニューアル案が出たので、いろいろご意見があると思います。

どなたか。

はい、どうぞ。

○中田委員：リニューアルのことで、ちょっと早めに言っておいたほうがいいのかというところで、23ページのレストランの下にある樹冠トレイルのことなんですけど、多分、屋上のほうに、あっちこっち木道なんかをずっとつなげてしていくと思うんです。そして読んでいくと、通路だけで、ところどころにベンチを置くということも書かれているんですが、できれば雨よけ、日よけ、そして風よけのできるベンチの周りに、できたら軽い透明的なもので、そういうカバーをつけていただけないかなと思いました。琵琶湖はやっぱり、お天気のいいときだけではございません。結構風も吹きますし、外でゆっくりしたいなと思うときに、ちょっと雨よけ、日よけがあると、いいんじゃないかと思います。自然は晴れたときばかりではございません。琵琶湖も雨の降っているときとか、霧のあるとき、風のあるときでも、すごく趣のある琵琶湖を見てもらえる。そのときにちょっと立ちどまってもらえるために、できればそういうカバー。風がきつかったりす

ると、傘だけではだめですし、あそこに屋根があるから、じゃ、あそこでちょっと待ってみようかと思えるような、そういうのをできればつくっていただけたらありがたいなと。それから、シニアの方にも繰り返し来てもらえるように、そういう椅子なんかを多めにしていただけるとありがたいです。

そして、戻りますけど、もう一つ、ついでに言ってしまいます。19ページのところのC展示室で、「ヨシ原を歩いてみると」というのがございます。左側の18ページのイメージ図を見ていると、何か壁際の両側にヨシが植えてあるなという感じしかちょっとしないんですが、私もヨシ刈りを何年間か、小さいグループでやっていたんですが、目の前で見ていると、ヨシって、そんなに大きくないなと思っていたのに、ヨシ原の中に入ってしまうと、えっ、こんな高かったっけと覚えることがすごくあるんです。ですから、19ページの2番の壁のほうに、ヨシを多分植えてあるんだと思うんですが、その間に人が一人通れるぐらいの迷路的な、両側にヨシがおおいかぶさってくるような通路みたいなものをつくっていただいて、そこにネズミの巣とか、ヨシキリの巣とか、そういうものがちょこちょこつとあると、小さい子どもたちがたたと迷路みたいに入っていくたり、大人も入っていくって楽しいと思うんです。両側をヨシに囲まれるという感覚をできたらつくっていただきたいなと思います。

とりあえず2点、よろしくをお願いします。

○市川会長：ありがとうございました。

そしたら、私にもしゃべらせてください。

この計画案、参加・体験型のコーナーもたくさんあって、非常によくできていると思います。ただ、ちょっと物足りないなと思うところが**あります**。フィールドへの誘いたいなことと、育てるということがよく書いてあるんですが、本当にできるのか**というところで少し心配です**。水族館の話をちょっとしますが、自分が子どものころに見た魚や川、それから何かの野外活動で**見た**田んぼの生き物や川の生き物、それを水族館で見ると、ああ、こういうものがいたなというふうに感じてくれるお客さんが昔はたくさんいました。でも、最近はそのようなお客さんはどんどん減ってしまっていて、今は自然というと、水族館の自然か、もしくはテレビで見た自然しか知らない**人が増えています**。

そこで言う水族館の**自然**というのは、雑誌に出ていたり、テレビで見る自然ですから、サンゴ礁の展示だったり、それからジンベイザメだったり、ペンギンがたくさんいる島

だったり、要するにきれいなもの、かわいいもの、癒やしてくれるものが中心です。今の水族館って、その3つがそろっていれば、営業が成り立つんですね。そういう水族館しか知らない。自然をそういうものでしか知らない子どもがたくさんふえています。洋服をどろどろに汚して、お母さんに怒られたことのない子が、今、どんどんふえています。

ところが、そういう子どもたちを例えば田植え体験みたいなところに連れていくと、本当にうれしそうな顔をしてやっています。小さなビオトープに網を持って入れさせると、初めはやっぱり、汚してもいいのかなとちゅうちょしています。水に入るのも嫌がります。でも、やっているうちにだんだんおもしろくなってきて、例えばオタマジャクシ一匹でもとれたときに、すごくうれしそうな顔をします。うれしそうな顔をしたときに、その子は初めて自然に触れて、やっとそこから自然に関心を持っていくということが始まるんですね。

今度のこの博物館にしても、琵琶湖への関心を持つというところで、まず琵琶湖はおもしろいな、楽しいなというところが何かないと、最初の一步が入っていけない。しかし、琵琶湖博物館を遊園地にするわけにいきませんので、初心者の子どもの第一歩をどうやって踏み込ませるかかが重要です。本当に来てほしいお客さんをふやしていくには、そのところの地道なところから始めないと、うまくいかないのではないかという気がします。だから、そのところの第一歩をどうするかという点がまだ踏み込みが浅いのかなという気がします。

福島の水族館に半月ほど前に行ってきました。あそこはビオトープや干潟を屋外にすでに持ち、さらに里山をつくる工事がこれから始まります。屋外施設の中で、自然というものを体験的に教えるという、そういうコンセプトで水族館が動いていると思います。そういうことも考えていただいたらいいのかなと。

それから、もう一点、お客さんの件ですが、1年ほど前に篠原館長も行かれましたけど、池田市のラーメン博物館に行ってきました。すごい混んでいます。あそこでラーメンを自分たちでつくってみるというコーナーがあるんですが、予約しないと参加できません。土・日に関しては何カ月も、半年ぐらい先まで予約が詰まっている、そういう状況です。

だから、本当におもしろい参加・体験型のものがあれば、やっぱり人は集まるだろう

などというをつくづく感じました。その辺のことも含めて、新しい博物館をつくっていただけたらいいのかなというような気がします。せっかく具体的なものが出来たのに、抽象的な話をしまして、すみませんでした。

ほか、何かありますでしょうか。

はい、どうぞ。

○小田委員：この基本計画についている資料編のほうを、昨夜、ざっと読ませていただきました。幾つかこの場で私が話したこともピックアップしていただいて、うれしいです。

その中で、「知識のクロスオーバー」という言葉を私は使ったんですけども、今回、展示の中で一つのテーマにとどまらないで、そこから飛んでいくような、ワープしていくような感じで、いろんなところへ飛んでいけるという展示ができるというのは、うれしいです。

先だって2月8日に、県民の方を招いてのワークショップというのがあるって、これに私も参加させていただいたんですけども、私は水族展示で、学芸員の金尾さんの展示の説明がとてもおもしろかったです。あの方ご自身が博物館が大好きな方ということもあって、自分はここんことを見せたいんだということをお話しておられました。お恥ずかしい話ですけども、あの水族展示をずっと回って、あっ、ここはこういうテーマで、こういう流れで、こんなふうにつくって、こんなふうに見せようとしているんだなということ、その説明で初めて知りました。

じゃ、何が足りないのかなというと、やっぱりせっかくそこにハードがあるのに、それを上手に見せられていないなという印象を受けました。その後のお話をみんなでした中でも、ハード的なものよりも、やっぱりソフト面を求められる方が非常に多かったです。こういう場に来られる方ですから、決して博物館はユニバーサルスタジオ・ジャパンじゃないということを知っておられる方ばかりですから、そういう意見が出てくるのは当然なんですけども。私は本業はシステムエンジニアなんですが、導入に際しては、こんなハードウェアを入れて、こんなソフトウェアを走らせてということを慎重に検討しますが、その中でヒューマンウェア、人をどう使うかという部分がなかなか議論されていないところが多くて、じゃ、このシステムを使って、どんな人がアウトプットを使うのか、誰が操作するのか、操作する人は熟練した人なのかということをお話してないシステムというのは、大概つくった後でとん挫します。やはり人の部分というのは非

常に大事であって、今回、このお話を聞いていても、こんなものを見せるという仕掛けはできている。でも、それに介在する人間の部分はどうかのというと、ここにはこれからですとしか書いてないんです。展示と交流員さんや学芸員さんのかかわり方とか、そういう人的な部分をもうちょっと具体的にすると、もっとプランが生きてくるんじゃないかなと思います。それが次の計画として、もっとはっきり出てくればいいなというふうに期待はしています。

それから、先ほど橋詰さんがおっしゃったように、小さな遊び心というのでしょうか、そういうものはそんなにお金のかかるものではないと思うんです。それは皆さんがいるんな工夫・アイデアを出して作っていく、これは大きい効果だと思います。

それから、またハード、ソフトの話になっちゃいますけども、この中にはいろんな展示がありますが、いくらそこに本物のヨシがあったとしても、それはやっぱりバーチャルな世界です。ICTにしてもそうですけども、そこで体験しました、靴は汚れません、服も汚れません、転んでけがもしません、虫に刺されたりもしません。そこでおもしろいなと思って、それは現実じゃないんです。だから、そこからもう一歩外へ出てほしい。琵琶湖博物館は外に出ると、非常に広い敷地があって、湖にまで行くのは少し距離がありますけども、終わった後、ここから屋外へ出てほしいなと思うんですね。その誘導がほしいなと思うんです。その日はお母さんが、「こんな服着てるから、だめよ」と言うかもしれないけども、もう一回来週来て、今度はあの湖のところで遊びたいという気持ちが芽生えるような、そんな誘導の仕方はできないでしょうか。

それから、4つ目ですけども、交流から教育していこう、積極的にそういう人材を育成していきましょうということを表に出してもらおうというのは、いいと思うんです。でも、今まではどうだったかという、ちょっとレストランの話が出ていましたけども、レストランって、外がガラス張りになっているというのは、何も中に入っている人が外の景色を見るだけじゃなくて、外を歩いている人がおいしそうに食べている人の姿を見て、あっ、うまそうだな、あっ、あの人でも入っているから、私でも食べられるぐらいの値段だなということがわかるから、入るような仕組みになっているはずなんです。

今の博物館の交流活動を見ていると、悪く言えば、閉鎖的な感じがします。この中で一部の方だけが交流しているようにしか見えない。何か自分も入ってできることはないのかなというところが全然見えない。それがもっと外から見えて、あっ、これやったら

私も参加できるなというところがあれば、もっともリピーターがふえて、交流活動にも参加してくれる人たちがふえるんじゃないかなと思います。

4つ、きのう、いろいろ考えたことを申し上げました。以上です。

○市川会長：ありがとうございました。

ほか、何かございますでしょうか。

はい、どうぞ。

○前田委員：今のお話に少し関連するかもしれません。

2つあって、まず一つ目は、この博物館には一般の人が利用するための色々な方法があって、電話で質問したり、観察会や講座に参加したり、また研究の場として利用するなど多岐にわたります。けれども、それを一般の方々は意外に知らないというか、利用の方法がわかりにくいのではないかと思います。こんな使い方ができますよ、こんな使い方をする人がありますよという、皆さんへのお知らせがあればいいなと思います。

もう一つは、私は、この前の会議で申しましたように、「大人が日常的に楽しめる博物館」というコンセプトに非常に期待しております。その具体策が今度の資料で見えてきたように思います。「日常的に」ということは、博物館に何度も来て楽しむ中で何かを発見してもらい、そこに目的があると思います。資料では、その方法としてハンズオンや人の交流が挙げられていました。琵琶湖博物館の非常に良いところは、博物館の中に“人の顔が見える”ところです。展示を見て理解してくださいとするだけでなく、展示の提示方法や説明に工夫が重要なことはもちろんです。けれども、それだけではなかなか発見につながりません。やっぱり人と人が対話をして、双方向に会話することで発見があると思いますので、交流においては“双方向”を実現する（今もしていらっしゃるのでしょうが）一層の努力をお願いしたいと思います。

以上です。

○市川会長：はい、ありがとうございました。

ほか、ございますか。

どうぞ。

○津屋委員：これだけまとめることはすごく大変な作業だったなと思います。客観的に読ませていただいて、細かいところはまだ私もわからないことあるのですが、課題をかなりしっかり掘り出して、それを具体的に落とし込んでいるというところが見ら

れます。新たなキーワードの中に「常に新しい体験ができる」とか、さらには「個人の能力を発揮することができるような場を提供します」とありますが、これを実行するにはとてもエネルギーが要ります。そこにかかわる職員さん、スタッフさんがすごく大変だなというように逆に感じまして、これはもちろん、今回のものは基本計画案であります。今後どのような博物館の実施体制で、新たなこのようなコンセプトに向かっているのか、運営体制、実施体制のところはどうしてもこの資料だけでは見えません。これまでの琵琶湖博物館はすごく頑張ってこられてきましたが、運営体制の中でここがよかった、次に向かってはこういうところをちょっと改善して、という具体的な体制の整備がないと、なかなかここに出している絵が具体化するのには難しいのではないかと感じてしまいます。今後の運営体制の在り方についても、多少ここにもう一つ盛り込まれますと、なるほど、このような運営体制で進めるのかということが、実感としてより伝わるかなというのは少し感じました。

私たちのような組織も、常にそのあたりは県のほうからも要望されている立場ですので、実行するためにはどのような体制で進めるかと、あともう一つは、やっぱり評価です。成果を、どのようにして第三者的な視点で評価するのか、そのためにどのような推進体制をつくるのかというようなところは、どうしても常に盛り込まなければいけない部分であると思いますので、そういったところはまた今後、これにプラスされていくのかなと思っています。

あと一つ、私、滋賀へ来ましてから、琵琶湖博物館にはずっとお世話になり繋がらせていただきましたが、やっぱり国内でも開館のときから注目されたのは「はしかけ制度」ですね。フィールドレポーター、展示交流員という非常に斬新な取組みで、人がきちっと細やかにおもてなしする、対応しますという、博物館の中であって、とても人の姿が見える、またそういうキーワードを非常に上手に出されていたので、「はしかけ」という言葉は全国区になりました。ボランティア活動の中でも先駆例として、今でも語り継がれている。そういったところは資料の前半のところの、17年度の取り組みのところにあるのですが、リニューアルの中で「はしかけ」については、何となくもうあるのだという前提で書かれているのかもしれませんが、逆にうまくいった部分、これからさらに人を育てていく琵琶湖博物館という中で、もう少し「はしかけ」からさらに外に打って出る何かを考えるなど、そういったところが、とてももったいないなという感じがし

ました。

また今後、新しいコンセプトに向けて実行する上では、優秀な総合的なプロデュース能力のあるような方がいないと、各セクションで日々新たな体験プログラムや、いろんな企画がどどこ出てきたときに、個々に動いてはいても、トータルで把握し、進めていかないと、今、琵琶湖博物館全体がどこにいるのか、見えなくなるかもしれない不安も予測されます。そういった意味で、総合プロデュースやコーディネーションやマネジメント的な役割の人が必要なものになるのではないかと感じております。

最後に、先回の会議でも言いましたが、学校との連携のところ、この28ページに非常に奥ゆかしく、「湖の子」「やまのこ」等の学習プログラムとの連携を強化し、と書いてありますが、最近では、びわ湖ホールは、「ホールの子」事業として実施していますし、いよいよこの春からは、陶芸の森も「つちっこ」ということで、滋賀の子どもの体験活動の5本の柱に入っていましたので、これはもう連携どころではなく、琵琶湖博物館も「びわはくっこ」事業というようなイメージで、滋賀県の子どもたちは琵琶湖博物館に行くというような形で、1本の柱として立っていただくのにふさわしい施設だと思いますので、積極的に考えていただき、県の教育的な体験活動のひとつの柱になっていただけたらと思います。

以上です。

○市川会長：はい、ありがとうございました。

ほか、ございますでしょうか。

はい、お願いします。

○北島委員：ありがとうございます。学校現場でいろいろ活動させていただいて、特に学区にありますので、いろいろ学芸員さんに来ていただいたりとか、先月も2つの学年がここに寄せていただいて、学習させていただきました。本当にいろいろご支援いただいています。

これを見せていただいて、細かい話になるかもわかりませんが、うちのところがちょうど今、創立140周年で、地域の方が民具をたくさんくださいました。去年の夏に大規模改修をするので、今まで眠っていた民具をどうしようかなと。せっかくあるけど、なかなか使えないし、どうしようかな、ひょっとして修理したほうがいいのかなどか思いながら、ちょっと琵琶湖博物館さんのほうに相談したら、これはすごい宝がいっぱい

眠っているということを言われて、その展示室を民具資料室という形で整理してくださいました。それはすごくありがたいので、この資料の10ページにあるのかと思いますけど、地域活性化の核となる博物館ということで、ここが活性化するというのと、あと、「森」とおっしゃっているので、各学校なり、いろんな地域でそういう根というんですか、博物館的なそういうことを支援していただくということはすごくありがたいので、今まで以上にそういう支援等をいただけるとありがたいかなということを思っています。

また、体験ということ、実体験は本当に大切ですし、一方、ここで挙げていただいている26ページのICTの活用ということをおっしゃっていました。これから子どもたちもそういうリアル体験とともに、求められる力というのはいっぱいあるかと思うんですけども、例えば草津市の場合は26年度から、今議会中ですけども、タブレットを全小学校に配布みたいな形になってきたので、例えばそれを持って来て、ここで何かWi-Fiで学習できるとか、なかなか難しいかもわかりませんが、そういうWi-Fi利用可能空間の整備なり、その中身のことについてもまた検討いただけるといいかなということを思いました。

また、いろんな主体との連携ということで、28ページのほうに書いてくださっている多様な主体というところで、私自身が今、草津市の理科の支部長をさせていただいて、来年、草津で理科の科学作品展とか県展というのがあるので、何かそういうところとつながっていくと、理科好きの子どもなり保護者が集まるところと、そういう琵琶湖博物館のアピールなりしていただけると、また理科好きとか、環境教育との裾野が広がる。先ほど会長がおっしゃってくださいました、本当にその出会いというのをすごく大切にしていけたらなということを思いますので、よろしくお願ひしたいと思います。

以上です。

○市川会長：はい、ありがとうございました。

じゃ、順番に。

菊池委員さん、何かございますか。

○菊池委員：ありがとうございます。いろいろ皆さんがおっしゃっていただいたところと重なるところが多いので、ちょっと違う観点からなんですけれども、各展示室のところの詳細は非常にわかりやすくなったと思うんですけれども、先ほど橋詰委員がおっしゃったみたいに、やっぱり初めて来た方が一番印象に残るのは入り口からだと思うんですけ

れども、その入り口を入った瞬間に、この博物館が何を指そうとしているのかということがきちんとないと、展示室それぞれは、前もちょっとお話ししたんですけど、一つの展示室を出ると気持ちが冷めて、次に行って、また出ると気持ちが冷めてというのではなくて、入った瞬間から出る瞬間までを一つの空間として楽しむための全体のコンセプトと、その見せ方というところを展示空間以外でもきちんと考えていく必要があるのではないかなというふうに感じました。

あともう1点、先ほど人の配置、人との交流を重視されているということがありましたので、そこは非常に期待したいと思うんですけど、博物館ではないんですけど、私が子どもの環境教育に携わっていたときに、自分が携われば携わるほどいろんな知識を得て、教える側に回れるという、人の側の変化が逆にそこを訪れるきっかけになったりということがあると思うので、例えば子ども学芸員じゃないですけど、ここに何回か来て、こういうことを経験すると、今度は皆さんが教える側に回って下さいねというような、来た方も今度は博物館のメンバーとして参画していけるような位置づけというのをうまくつくって、それによって展示を楽しんだり、あるいは自分が学ぶことを楽しんだりというような双方向の仕組みをつくっていただけたらいいなというふうに感じました。

以上です。

○市川会長：河上さん、何かございますか。

○河上委員：中学校の現場ではいろいろと学習を進める中で、こういうような博物館の利用というのは限られた部分でしかできないのが残念なことなんですけれども、ただ、このリニューアルされていく博物館。非常に学校としても、校外学習なり、体験学習をする中で、非常にいろんな分野が組み込まれていて、どういうところから目を向けて、この会場に来て、学校で学習を進めていくのか、非常にたくさんの方が網羅されているので、いろんな機会に使えるかなというふうに感じています。

ただ、理科だけではなくて、歴史とか、そういう分野でも非常に子どもたちの関心、意欲を持っている子がたくさんおります。そういう面でも、ここを活用できるような素晴らしい展示内容になっているかなというふうに私は感じさせてもらいました。ありがとうございます。

○市川会長：ありがとうございました。

伴先生、何かございますか。

○伴委員：これは質問をしてもいいんですか。

○市川会長：はい。

○伴委員：博物館は展示が主で、皆さんの意見、非常に参考になると思うんですけども、この博物館は研究活動を一緒に進めていくんだということで、できた当初からやってきて非常に立派な研究業績が今まで蓄積されてきているわけなんですけれども、これを拝見しますと、リニューアルの方向性のところにも、研究・調査を充実していくんだということが書いてあるんですけども、これをきちっと担保するような計画が話されなかったことが残念です。具体的にどのような仕組みをつくるのか、そういうことがあれば、教えていただきたいというのが1点です。

それからもう一つ、ちょっと細かくて申しわけございませんが、先ほど将来予測のところで、来館者数が1期、2期、3期のオープンに沿って、リニューアル効果で来館者数がふえる予測をされているんですけども、この根拠を教えていただきたい。

2点です。よろしく申し上げます。

○市川会長：どなたか、お答えできる方、いらっしゃいますか。

まず最初の研究の担保のほうを。

○篠原館長：大変厳しいお話ですけども、伴先生のおっしゃるのはごもっともな話で、リニューアルが長い期間かけますし、それからその次だって考えておかななくては行けないわけですから、当然、研究体制というものの担保を考えておかななくてはなりません。

ただ、この問題は大変難しく、ご存じだと思いますけども、定員削減をずっと行ってきて、平成26年度で一応それはストップして、その後、県がどのように人員を回復させるのかどうかというのがまだ未定なわけですよ。だから、その問題も含めていますし、それから17年目になりますけれども、初期におられた方もだんだん年をとってこられて、私の右左におられる方も定年間近になっているというようなことになってきますよね。それで新しい学芸員の人とか、新しい分野とか、それから研究の実質中身で言うと、共同研究、総合研究、それから専門研究とか、それぞれやって、個人に依存するもの、それから共同に依存するもの、新しい研究体制をつくるかということ、その辺のときにはまだ議論は進んでおりません。ただし、研究を基盤にした研究型の博物館で発展的にあり続けるということは考えております。

ただ、具体的な例で言うと、一番考えておかななくてはならないのは、とにかく研究費用そのものとか、そういったものがどんどん減少していますし、いろんなところで難しい状況になっているので、外部資金導入を図っていくということが、これはもう館員全体が認識しているところで、外部資金を導入しながら研究体制を整えていくと。新しい研究体制で、共同研究、総合研究の上に、さらに例えば連携研究とか、給付機関の試験研究機関との間の連携とか、そういうもので少し芽を出しているものもありますけれども、それをどういうふうに体制的にするかということについては、まだ十分な議論はできておりません。

ご指摘のとおりのごことは、機運としてはそのとおり、考えていかなくてはならないと思っていますので、これをリニューアルの基本計画にしよう、でき上がった次の段階で、今年度からはそのことも少し視野に入れながら議論を進めていきたいというふうに考えております。そんなことで許していただけませんかでしょうか。

○市川会長：観客数の予測について。

○事務局（廣瀬補佐）：はい。じゃ、お答えをさせていただきます。

観客数の予測につきましては、いろんな計算の仕方があるんですけども、今回はうちのほうでもいろいろ今後ふえていくために、館の面積と比例するということが今までの傾向とか、いろいろ調べた結果わかってきまして、この面積というもの、当館は結構規模的には大きいので、近隣のリニューアルされたところの伸び率と面積比の率で計算をしたものでございます。この場合、近隣の館は水族館とそれ以外の館ということで、別に計算をしております。当館は総合博物館ということで、歴史とか、いろんな分野がございますので、水族とそれ以外の総合博物館としての伸び率を計算したものです。それに加えて、どうしても初年度は伸びるんですけども、リバウンドもございます。その辺も見越した上での計算方式をとっております。

計算の方法については、簡単に以上でございます。

○伴委員：そうすると、簡単に考えて、展示面積がふえるということによって来館者数がふえるという予測をしておられるということですね。

○事務局（廣瀬補佐）：展示の改修面積ですね。ずっとそのままに置いておきますと、だんだんお客さんの数は減ってまいります。ただ、それをリニューアルすることで、他館さんもそうなんですけど、来館者数がリニューアル効果で増加をいたします。その他館の

改修前後の人数のふえ方の伸び率に面積を勘案したものでございます。

○伴委員：わかりました。研究の面については、先ほど大学との連携というのもありましたから、例えば卒論生の受け入れなんかを考えていただくという、そういう仕組みがあるといいんじゃないかという気はするんですけどね。この辺、大学がたくさんありますから、大学だけで抱えられない卒論生を持っている大学もございましょうから、そういうのがうまく使えればいいのかなんていう気もするんです。

○篠原館長：これは琵琶湖博物館だけではないんですけれども、滋賀県に八十幾つかある博物館協議会というのがありますけれども、そこと現在、環びわ湖大学・地域コンソーシアムという、今、立命館の学長が理事長をされていますけれども、そこと博物館協議会との間では連携する提携をこの間調印しましたので、それによって、それをもう少し個別に各館の中で、どのような連携があり得るかということも今後も考えていきたいなというふうに思っています、そのうちの一つに、おっしゃったようなこともあるやもしれません。我々が考えていますのは、要するに博物館の資源をうまく大学が利用していただくということでいくと、例えば歴史系であれ、自然系であれ、ここにある資料を使って研究をするのを、大学院クラスとか、そのあたりにしていただくということで、まず門戸を開くようなことも考えていかなくちゃいけないし、逆に教育実習なり、それから野外フィールドワークとしての入り口として、こういうところを使っていただくという形で、実習なんかにこういうところを使っていただく。それはここだけではないんですけれども、滋賀県全体の博物館を使っていただくという形での連携ですので、その突破口はやっぱり琵琶湖博物館がそういう意味ではリードしてきていますので、琵琶湖博物館から出発させるということも十分考えられると思いますし、そのことは考えていきたいなというふうに思っております。

○市川会長：いいですか。

○伴委員：はい。

○市川会長：そしたら、廣畑委員さん、お願いします。

○廣畑委員：前回の会議のときは、ちょっとほかと重なってしまって参加できなくて、非常に申しわけなかったんですけども、今回、資料のほうを事前にお送りいただいて、いろいろと見せていただきました。

きょう、ずっと考え方も含めてご説明もいただいたんですけども、個人的な印象か

らいきますと、すごくよく本当にまとめていただいているなど。過去の論議の中で、何かイメージがよくわからない、どのように考えられているのか、ちょっとつかみどころがない部分がありますねみたいなことも言っていたんですけども、そういったところについても、思いを形にしていくということでは、しっかりまとめてきていただいているのかなというふうに思っています。

展示室関係のゾーニングのイメージなんかもしっかりと書いていただいているんですけども、例えば来館されるお客さん、大きくは一般の方、あるいは子どもたちの環境学習でということも何度もいろんな場面で今回掲げられているんですけども、子どもたち、学校の子どもたちということを考えていったときに、ゾーンごとにテーマがはっきり分かれているんですけども、今回、これ、一筆書きのようにずっと見せていくようなコンセプトに全てのゾーンがなっていると。そのこと自体を本当にそういうふうに、こっちの思惑どおりにお客さんに見ていってもらえるような工夫というのも、これから先考えていく必要が出てくるのかなと。

特に、いろんなゾーンごとに小部屋ができ上がって、大人の人が強く興味を示すところ、子どもが強く興味を示すところ、絶対出てくると思うんですね、人それぞれいろんなところで。そうしたときに、どこかのゾーンに人がたまってしまうと、そこをパスして、こっちが見てほしい順番でない順番で見ざるを得なくなってくることが、先ほど説明いただいたように、来館者がずっと伸びていけば伸びていくほど、そういうような機会がふえていくんじゃないかと思うんです。そのときに、特に時系列的に見せたい琵琶湖の生い立ちを含めた変遷の部分なんていうのは、そののところを逆さまに見たり、順番をめちゃくちゃに見ていくと、何か思っていることがそのままストレートに見ている人に伝わっていかないようなことにもなるんじゃないかなと思うので、ぜひうまく人を流していく工夫というのも、せっかくここまで考えていただいたんですから、これからの検討の中で加えていただければなというように思います。

それから、やはりわくわくどきどき、何か来て発見することができるか、気づくことができるというのは、すごく大切なキーワードになってくると思うんですけども、今回は博物館の外もしっかりと取り込んだような形でリニューアルを考えていきたいと思います。ということはこのコンセプトの中で説明いただいて、よく読み取れるんですね。そうすると、アクティビティーな部分というのも同時に考えていかないといけないので、見て

回る施設なんですけれども、その中で子どもたちが活発に動き回れるような見方というのもできるようなところがあればいいのかなというようなことも感じたりしますので、そういうことをもしご検討いただけるならば一緒に、できるかできないかは別として、あわせて考えていただければなというふうに感じていますので、よろしくお願ひいたします。

○市川会長：今のご意見の中で、参加体験型のコーナーが結構ふえているので、滞留というのは必ず起こるはずなので、順路の件をどのようにお考えになっているか、どなたかお答えできる人はいますか。

○事務局（里口専門学芸員）：**本当のことを**言わせてもらおうと、考えていません。ただ、流れどおりに見ないと、全部が把握できないというような展示はやめておこうというふうに考えています。例えばC展示室ですと、19ページにゾーン図がありますが、大きく分けると7つのコーナーがあるんですけれども、2番、3番、4番は景観、琵琶湖の湖岸あたりから山の森のほうへとさかのぼっていくような3つの景観を出しているんですけれども、展示としては細かい内容をちょこちょこ展示していくような流れではなくて、ヨシ原というのはどんなところなのかというようなことが、ここの展示に入るとイメージが何となくつかめると。そこに興味がある人は、もっと細かく見ていくと、ヨシ原にいる生き物であったり、生き物とそここの場の関係であったりというようなものがわかってくるような、そういうようなことを考えています。ですから、ヨシ原に入ると、あっ、ヨシ原ってこんなところなんだな、余り興味ないなという人は、次の田んぼのコーナーに行って、田んぼを見ていたら、あっ、何か湖岸と関連しているかなと思ったら、ヨシ原に戻るといような、そういうこともできるようなことを考えています。

ですから、ここで滞留したらどうしようかというような具体的な内容は、今のところ、正直なところ考えていなかったんですけれども、全体像としてはそういうような、何となく伝わる、興味を持たれた方はもっと細かく知ることができるというような展示のつくりを今のところは考えています。

○市川会長：はい、どうぞ。

○中田委員：今の展示の流れを見るというのは、初めて来られた方には確かに流れに乗って見ていただきたいと思います。でも、それは時間に余裕のある方です。私もあっちこちの博物館や美術館の会員になって、ちょこちょこ行きをしているんですが、そうし

た場合、割とすっ飛ばします。自分が今、興味のあるところだけをふっと1時間なら1時間見て、さっと帰るということをよくやります。リピーターをふやすという意味では、そういう人を取り込むことを考えたほうがいいので、この展示の仕方で人の流れがずっと書かれているんですけれども、例えば15ページのA展示室なんかは真ん中に部屋がありますので、出入りして、自分の見たいところだけ集中的に見て、さっとあとは抜けるということもできるけれども、あとのBとかCは、これはぐるっと回らないといけないので、行きたいところだけ行きたい者にはちょっと困るなど実は考えていました。

そういう意味で、里口さんの考え方、滞留したらしたで、また次、今度来てみようという、私なんかもそういう考えも割とあります。遠くからの方にはもちろん面的にずっと見ていただきたいですけども、県内の人を取り込むんだったら、近場の人を取り込むんだったら、そういう見方があってもいいんじゃないかなと思いますので、どっちかという、BとかCのところで近道して抜けられる方法を考えてほしいなど、実はこの図面を見ながら思っていました。

○市川会長：はい、ありがとうございました。

次、松江委員さん、何かございますか。

○松江委員：3点ほど質問と要望をお話ししたいと思います。

まず1つは、いわゆる展示・交流空間につきましては、再構築については非常にいろいろと取り入れていただいている、非常によいのではないかと思います。前にも一度ご質問したかもしれませんが、琵琶湖の水に触れるという部分、いわゆる水槽とか展示ではなくて、直接来館者が琵琶湖の水に触れたり、あるいは水を飲むとか、水源としての琵琶湖というものがありますので、そういうものが体得できるものがこの中に入っているんでしょうかということなんです。水辺に触れるという、本当に琵琶湖の水に触れるということが出来るかどうか。私は、これは琵琶湖博物館の非常に大きなテーマだと思いますので、前にもこのご質問をしたかと思いますが、そこがもう一つ、私は見えてきていないなというのが一つあります。

それから、2つ目は30ページ、31ページに書いていますいわゆる効果的な広報・営業活動の展開ということですが、もう少しこれが具体的なものでないと、集客、来館につながっていかないのではないかと。いろいろ項目別に書いてはいただいていますけれども、じゃ、具体的にどうするんだと。それこそ展示・交流空間の再構築のページを割

くぐらいの、たった2ページでこれだけのことしか書かれていないのは、本当にリニューアルしたときに、さっきの32ページのように、第1期オープンでぐっと人が伸びるというように書かれていますけれども、先ほどもどういう根拠でこの試算がされているかというお話ありましたが、段階的に1期、2期、3期と人がふえていく、来館者がふえていく予測ですが、それを達成するためには、効果的な広報・営業活動の展開というのがもっと具体的に、こうしなきゃならないとか、こうすべきだというのが、もう少し今の段階から落とし込まれていかなければ、間に合わないんじゃないかという気がいたします。

それと、3つ目は実績のところでも書かれておりますが、琵琶湖淀川流域への部分ですが、やはりこの琵琶湖というのが、これも前にお話ししたかもしれませんが、当然、琵琶湖から淀川流域にかけての水の資源としての価値があり、その流域の人たちにこの琵琶湖博物館のよさ、大切さというものをもっと遡及していかなきゃならない。さっきどこかに書いていましたが、認知度が県内では7割で、県外は3割とか書かれていたが、県外の3割という部分について、特に琵琶湖にかかわる流域の人たちにここを訪れてもらわなきゃならないと。つまり京都とか大阪の人たちが、ここのことをもっともっと知ってもらって、県内だけでなく、少なくとも流域の京都、大阪の人たちが7割ぐらいになるように、まずは持っていかなきゃならないんじゃないかというふうに思いますし、今、大津市と京都市が疎水を使っての観光に取り組もうとしておりますが、疎水に関しても琵琶湖は全く関係がないわけではなくて、まさにそこが水源なわけで、そういう部分での疎水との連携とかいうのも一つのテーマに入ってくるんじゃないかと。もっと言うならば、京都は年間5,000万人の観光客がいるわけで、5,000万人のうちの1%の50万人でも、疎水とか琵琶湖をテーマにこっちへ持ってこれれば、すぐにもこのグラフは達成できるというふうに思うので、そういうもともと人が集まってくるテーマの部分に対して、もう少し手を突っ込んでもいいんじゃないかなと。そのためにはどうしたらいいかということになるんですけれども、その部分はもう少し大事なかなというふうに思います。

長期の計画ですし、今、ここのグラフには平成32年と書かれていますが、平成32年というのは2020年で東京オリンピックの年ですが、その翌年にたしか、滋賀県で2回目の国体が開催されるということですので、そのあたりまで視野に入れて、国体と

ともこれからつくられるみたいなんですけども、また回廊みたいな部分もあると思うんですけども、これもユニバーサルのに考えて、やっぱりどの方でも見られるような状態にしていって、参加させてほしいと思います。

あと、先ほど松江委員さんから出ていました国体や東京オリンピックなどが、これからこのリニューアル後に行われるような形になると思うんです。その中で、せっかくよいものをつくるのであれば、この県の博物館が県の施設をリードするようなユニバーサルのリニューアルというのを考えてほしいんです。ここの施設に見学に、学習に来れば、ユニバーサルのなことの知識が得られると、ほかの施設からも来れるような施設であればよいなと私は望みます。

また、職員さんとして障害者が働けるような施設であってほしい。今、子どもであって、先天的に障害を持ったような子どもたちが学習されて、学芸員さんとかになられた場合にも、ここの施設で働くならば大丈夫だと言われるような取り組みというのも頭の中に置いて進んでいってほしいと思います。

あと、先ほどからも少し出ていましたが、やっぱりお客さんがたくさん来るというのは望まれることだと思うんです。ただ、その中でたくさん来た場合に、車椅子なんかに乗っている観点から言いますと、寄りつけない、見えない、見学・学習ができないというような場面が多々あるんです。子どもさんなんかで車椅子乗っている方なんかだったら余計だし、ストレッチャーなりで生活しておられる方なんかでも余計そういう形になるんです。そういうときに、やっぱり動線を考えてもらうような、すみ分けを考えるような動きの中でのユニバーサルデザインというのはなかなか数少ないんですけども、やはりそういう混み合ったときのイメージの中でも考えていただけるような取り組みも少し押さえておいてほしいと思います。

以上です。

- 市川会長：ユニバーサルデザインに関しては、基本設計から実施設計に移る前に、第三者機関でのチェックというのは当然ありますよね。当然、そこでチェックを受けていただかなきゃいけないんですが、それだけで足りないのは、私、思うんですけど、最近、うちの水族館で赤ちゃん用のおむつを交換する場所はあるんですが、大人の方のおしめを交換する場所というのがないんですね。これからはそういうものまで必要な時代になってきますので、よろしくお願ひしたいと思います。

○山本委員：いや、そうなんです。カミングアウトするようですが、私もやはり失便、失禁するので、おむつとパットを当てて生活しているんですね。その中でやっぱり、この文面にも載っていたんですけども、保健室みたいな部分が設置されるようなことも書いてありましたが、学校施設なんかではあると思うんですけども、シャワールームみたいなところで体を清潔にできるというような形の部分があたりするんですね。そういうふうなものも、今、会長さんが言っていたので伝えますけども、やっぱり必要ではないかなというのは切に思います。

○市川会長：ありがとうございました。

そしたら、私にも具体的な話をちょっとさせてください。

15ページの図の中で、「ヒトといういきもの」というコーナーがあるんですが、自然環境がどんなに悪化しても、いろんな生き物が絶滅に瀕しても、人間は別だと思っている人が世の中にはたくさんいます。それはそうじゃなくて、きれいでもなく、かわいくもなく、癒やしてもくれない生き物のほうが大半で、人もその中の一部なんだよということがきちんとわかるような解説、展示というのがやっぱり必要じゃないかなと思いますので、よろしくお願いします。

それから、17ページのところの縄文から弥生なんですけど、私もこの間まで知らなかったんですけど、縄文時代にどんな家畜がいたかという、馬もいないし、ヤギもいないし、猫もいない。みんな弥生以降に外国から入ってきた生き物なんですね。縄文時代にいた家畜は犬だけなんですね。それはいいんですけど、例えば人がつくった自然というのが出てくるわけですが、今、私たちが知っている植物の中で、弥生以前は日本になかったけれど、人間が稲作を始めたころに日本にやってきたのだが、もともとの在来種だと思われている植物がいっぱいあるわけですね。そこら辺も多分、皆さんご存じないと思うので、その辺もやっぱりきちんとできたら解説・展示をしていただけるとうれしいなという気がします。

それから、先ほど展示の変化のことが出ましたが、展示がころころ変わってもいいようなトピックコーナーを充実したものがあれば、頻繁に来られるリピーターの方でも、あっ、今日は違うことやっているなと楽しんでいただけたらと思います。

以上3点、よろしくお願いします。

まだ時間が15分ほどございますので、どうぞ。

○津屋委員：先ほど松江委員と山本委員がおっしゃった、実は2020年のオリンピックに向けてなんですが、私、先月と今月と、東京のほうで文化庁の関係の会議に出まして、担当者と会ってきましたが、非常に今物すごい勢いで文化庁のほうは2020年に向けて、かなり予算規模も変わる方針で、取り組みが始まっています。先日行った会議では、文化庁の現役の長官、前の長官、その前の長官と、長官が3人並んでいらっしゃるような会議で、今後の方向性をお話くださいましたが、海外からたくさんの方がオリンピックで来られる中「日本全国で文化でおもてなしを」という、そういう大きな政策の方針を打ち立てておられました。もうご存じだと思うんですけど、その中で、「創造都市ネットワーク日本」というのが昨年度から立ち上がりまして、草津市と守山市はそこに参加・加盟していますが、今後、市町村だけでなく、滋賀県内の財団や文化施設もそこに手を挙げるすることができますが、今後全国で加盟する自治体、団体170ほどが核となって、いろんな取り組みを具体的にしていく方向性も出ています。

先ほど松江委員が、このオリンピックのブームに乗かってとおっしゃいましたが、まさに乗っかるべきと思うぐらいの勢いですが、やはり東京のほうは非常に盛り上がっているのですが、関西のほうは、あまりオリンピックに関係ないという感じなのですが、文化庁のほうは京都府庁内に関西の拠点をつくられてまして、局長も就任ということが先日の京都新聞に載りましたし、ぜひ関西の滋賀県の中の琵琶湖博物館は、草津市とも連携していますので、ぜひそういった意味で乗かっていただいて、国の助成も活用し、存在感を出して目立っていただきたいなと思います。他の委員さんがおっしゃった通り、2020年に向けても積極的によろしく願いいたします。

○市川会長：ほか、何かございませんか。

○中田委員：すみません、よろしいですか。

○市川会長：はい、どうぞ。

○中田委員：展示でB展示に歴史を考えるとということもあって、六道の考え方ですね。「殺生をめぐる葛藤」ということで出しているんですが、これはどっちかというと、生き物の命ということではあるんですが、ここだけを持ってくると、何かちょっと突拍子もない考えになってこないかなと考えています。

私も六道に関しては余り詳しくないんですけども、今、実は私の所属しているクラ

ブなんかで、地域のそういう信仰に関して、どっちかという、天台宗的な考え方の調査なんかをして、ある程度まとめようかということをやっているんですけども、六道というのが余り引っかかってこないんですね、あっちこっち調べてもらっているんですが。仏教の考えという、現世利益とか、国を守るとか、そういう考えばかりが出てきて、命としてのところが出てきていないので、今、特に子どもたちとか、そういう子たちにどう教えればいいのかという、この六道ということを引き張り出したときに、私もまだ勉強不足なので、いまいちわかっていなくて、どういう展示になるのかなというのをできれば教えていただきたいと思います。

○篠原館長：担当者がいないので、じゃ、私のほうから、わかる範囲でお話しします。歴史家がないから。

この「殺生をめぐる葛藤」というのは、ご存じのように、「肉食禁止令」というのが解かれるのが明治6年（●明治4年？）だったと思いますけれども、それ以前は、一応殺生禁断というのが建前上ではなっていたんですけど、遺跡の中で見たりなんかすると、例えば草戸千軒町遺跡なんかは犬を食べていましたし、切った跡がいっぱいありますし、江戸でもどんどん食べていましたし、広島藩では豚を飼っていましたし、先ほど市川さんがおっしゃっていましたが、弥生のイノシシだと言われたのは、今全て豚ではないかという説もあります。「殺生禁断令」の一番初めのが出てくるのが天武4年（675年）ぐらいのときに出てきますけれども、その間一応1000年以上の間にわたって殺生禁断というのが建前上はなっているんですけど、現実はどうだったか。この場合は「肉食禁止令」ですけども、肉食の中に魚は入っていたのかどうか。これは琵琶湖ですから、魚というのはどうなっていたんだと。ちょっと弱いことは弱いですね。だから、その殺生禁断を抜きにして日本の食べ物といいますか、そういったことは考えられないです。仏教思想は上流の階級にはそういうのはずっと浸透していくわけですけど、普通の庶民のレベルではどうだったのかということがよくわかりませんし、その辺のことをめぐる自然観の大きな変遷みたいなものを考えておられるのだろうと思います。これは私が直接担当しているわけじゃないですけども、歴史家の人がいまいませんから、あれなんですけども、これは結構重要な問題だろうと思います。日本人の自然観を考えていくときに、「肉食禁止令」を考えざるを得ない。殺生のことを考えざるを得ないというのは重要なことだし、これは歴史の——確実にと言えませんが——ある種の蓋然性の高

い考え方として、どういうふうなものが庶民の間にあったのかということは、事実として子どもも知るべきだし、我々は何で今、こういう肉なんかを勝手に食べていていいのか、魚を食べてどうだったのかということを考えるときには、大変重要な問題であろうというふうに私自身は思っていますが、歴史の担当が今いませんけれども、多分、そういうことを考えておられるだろうと推測しております。

○市川会長：ほか、何かございませんでしょうか。

○山本委員：すみません。

○市川会長：はい。

○山本委員：リニューアルのことではないんですけど、今現在のことでお聞きしたいことがあるんですけど。

○市川会長：はい、どうぞ。

○山本委員：以前もお願いしていたんですけども、ここのアクセスの向上という部分で、31ページに書いてありますけども、「地元草津市、バス会社と連携し、博物館へのアクセスルートにおいて博物館を認知しやすいよう案内表示等の改善を図るとともに、増便交渉を継続します」となっています。その中で、以前もお伝えしましたが、低床車両、低床バスの平日導入なんかの指導というか、お願いというのはどのような形になっているのか、お聞かせ願いたいんですけど。

○事務局（廣瀬補佐）：バスのアクセスにつきましては、以前少しお話しをしたことがあったかもしれませんが、こちらのほうから交渉をしておりましたところ、バスの車両のやりくりの中で、病院行きのバスとかに結構やはり低床バスがとられてしまっているという現状があり、路線バスが結構今経営が厳しいということで、事前にわかっていたらお話しするのですが、毎日確実というのは今厳しい状況なんです、というようなお話を伺っております。

ですので、今後も継続的にそういうようなお話をしていくとともに、バスのほうも耐用年数がありますので、更新されていくときがまた来ると思いますので、そういう際はぜひということでお話を続けていきたいと考えております。

○山本委員：ありがとうございます。わかりました。あきらめずに低床車両の完全配置、導入を求めてください。

○市川会長：よろしく申し上げます。

それでは、この議題につきましては、このあたりにしたいと思います。

(2) 琵琶湖博物館中長期基本計画2013年度行動計画の実績・評価および2014年度行動計画について

○市川会長：引き続き、議題(2)、琵琶湖博物館中長期基本計画2013年度行動計画の実績・評価および2014年度行動計画について、説明をお願いします。

その前に、松江委員さんのご用事があるということで、ここで退席されます。

○松江委員：大変申しわけございませんが、どうぞよろしくをお願いします。

○市川会長：それでは、事務局のほう、よろしくをお願いします。

○事務局（藤村課長）：企画調整課長の藤村です。先ほどは準備室の室長としてお話ししましたが、今回は企画調整課の課長としてお話しをさせていただきます。

座って説明させていただきます。

お手元のA3の大きいほう、ちょっと字が小さくて、ユニバーサルデザインになっていないので大変申しわけないんですが、お話のほうを聞いていただければと思います。

この中長期基本計画なんですけども、実は今、第3段階というところに入っております。この中長期基本計画は、スタートが2002年度から2015年度を計画期間としている非常に長い計画でございます。第1段階、第2段階、第3段階とあって、第1段階は2002年度～2005年度、そして第2段階が2006年度～2010年度、そして今回第3段階ということで、ここにも書いていますが、2011年度～2015年度という、そうした活動の計画になっております。

ちょっと簡単に概要を説明しますと、まずこの資料の見方なんですけど、左のほうに大きい枠が4つあると思います。左には細長い枠ですね。そこに中長期基本計画ということで、左の端のほうに基本方針が書かれております。

2つ目の大きな枠は第3段階、2011年度～2015年度の活動計画ということで、それぞれの事業について、この5年間でこういったことをやっていきますよ、ここまで到達をしたいと思います、ということが書かれております。

3つ目の一番大きな枠ですが、これが2013年度の行動計画と、そしてその計画の達成状況・評価が書かれております。ただ、まだ2013年度が終わったわけではありませんで、一応1月31日現在の状況を書いております。

そして一番右の枠が2014年度の行動計画です。来年度、こうしたことを目標にしてやっていきたいと、こういうことで整備をしております。

一番左端の基本方針ですが、まず博物館機能の強化として、「資料が活用できる博物館」、次に「研究を進めて活かせる博物館」、2ページ目を見ていただきますと、「新たな参加と発見ができる博物館」、そして3ページ目は「体験と交流を促す博物館」「対話と応援ができる博物館」ということで、5つの基本方針が博物館機能の強化という中に挙がっております。

そして、5ページを見ていただきますと、環境の整備ということで、まず1つ目、「拠点としての施設整備」、2つ目、「柔軟な組織運営」、そして次のページ、最後の6ページですが、「社会的支援と新しい経営」「存在基盤の確立」という4つの基本方針、合わせて9つの基本方針があって、それぞれについて事業を定めて、博物館の運営を行ってきているところです。

この第3段階、実は2011年度からスタートしているということで、2010年に策定をされましたが、その当時はまだこのリニューアルが具体的にしていなかったということで、昨年度あたりからリニューアルを視野に入れて、一部修正をしております。ところどころにリニューアルという言葉が出てくるのは、そうしたことになります。

それでは、時間の関係で全部説明することは不可能ですので、ちょっとポイントを絞って説明をさせていただきます。

まず、「資料が活用できる博物館」ということで、一番上の段の左から2つ目の枠ですが、展示リニューアルに向けての資料の充実というような、この5年間の活動計画があります。達成目標として、展示リニューアルに必要な資料の整備と書いておりますが、これに対しまして、真ん中の一番大きな枠の部分、2013年度行動計画の実績・評価では、その目標値を、これまで企画展示等で作成した展示物リストを加えた時限保存資料管理リストを作成するというので、リニューアルで活用できる、そうした展示のリスト、そうしたものをつくっていくという目標を掲げておりました。

これに対して達成状況ですが、展示リニューアル自体の計画案、こちらのほうが最優先になったということで、十分に進捗はしておりませんが、その横の自己評価に書いておりますように、現在ようやくこの展示リニューアルに係る大項目、中項目、小項目。小項目まで定まってくるので、どういったものを展示していくかということが見えてく

るわけですが、そうしたものに基づいて、一部の展示室では展示資料カードの作成を始めつつあるということで、評価としてはここでは三角というふうな形になっております。

そして一番右端の2014年度については、展示リニューアルに活用可能な管理リストを整備をしていくということで目標を掲げております。

また、一番下の「研究を進めて活かせる博物館」では、第3段階の活動計画としては、この事業・活動名の欄ですけれども、博物館ならではの学際的・地域的な研究をやっていくということで、真ん中の一番大きな枠、2013年度行動計画の実績・評価の目標値では、ここには具体的な数値を挙げております。例えば、地域の人々とともに研究調査成果の公表を8件やっていきます。統合研究による成果を生かした共同研究1件、外部資金による研究代表者・研究分担研究事業20件ということで、それに対して達成状況ですが、ここにあるように、地域の人々との研究成果の公表は20件、共同研究は3件、また外部資金による研究については、研究分担者も含めて25件という、そうしたことで、これについては達成ができたのかなというふうに思っております。

また来年度につきましても同様に、一番右下の端になりますが、数値目標を定めております。

2ページ目をお願いいたします。2ページ目は「新たな参加と発見ができる博物館」ということで、一番上の欄に「集う・使う・創る 新空間」の整備というのがあります。この新空間の整備、これはアトリウムの図書コーナーの横にある細長いコーナーですが、そこを継続的に年12件程度利用していただくということで数値目標を掲げてやってまいりました。1月末までに10件、その後2件が予定されているということで、何とかこの目標は達成できるかなと思います。

次に、一番下の国内外の博物館との共同展示の推進というようなものも目標で挙げております。真ん中の一番大きな枠のところ、2012年度に引き続いて国内外博物館施設との共同イベントの開催を行うということで、数値目標1件が挙げております。

達成状況なんですけれども、実は今回の企画展示、前回の博物館協議会でごらんいただいたかなと思いますが、内容の充実を図るために多くの博物館、動物園のご協力をいただいて展示会を開催いたしました。

さらにその右の自己評価の欄ですが、実は湖南省の博物館との協定を締結して、展示物の交換等もやっていきたいと思いますということで、来年度予定されている企画展示への協

力も得ることができたということで、そうしたもので成果が上がったかなというように思っております。

次の3ページですが、「体験と交流を促す博物館」です。一番上の段でございますが、第3段階の活動計画の事業・活動名に書いておりますように、地域主体の体験・交流活動に役立つ博物館の仕組みづくりということで、2013年度の行動計画では、その目標値として体験学習プログラムやサポートシートを開発していこうということで、新規で1件をつくっていきますという目標を挙げました。

また、その下のポツに書いていますが、新しい研究成果を取り入れたり、学校側のニーズに応えた内容への見直しも行い、また団体受付時に体験学習プランをわかりやすく説明する手法の開発ということで、その達成状況は書いておりますが、例えばプログラムでは前年度行ったものを改良して、誰もが指導者として進行しやすいパッケージ的な内容として完成をさせた。また、このサポートシートはリニューアルを見据えて作成・試行したというようなことで、ほぼ達成ができたのではないかなというように思います。

一番右端の2014年度の行動計画では、今度は新たな来館者層としての幼児・中学生のサポートシートの開発ということを一つの目標に掲げておりますし、WEBと連携した団体受付の簡素化ということで、これもリニューアルでICTを活用してやっていきたいなと思っている項目ですが、そうしたものを掲げております。

次に、「下の対話と応援ができる博物館」で、一番下の欄ですが、これは第3段階の活動計画の事業・活動名をごらんいただきますと、対話と応援により、より多様で主体的なはしかけ活動への発展ということで、2013年度の行動計画の実績評価では、各グループがおのおのの活動テーマに応じて主体的に取り組むための支援と会員相互の交流を深めるための場の設定と情報の発信を図っていくということで、具体的には、はしかけ登録講座3回、はしかけオープンハウス交流会1回、ニューズレター6回ということで、これについても目標を達成できたのではないかなというように考えております。

次に4ページをお願いします。4ページは「対話と応援ができる博物館」の続きでございます。一番下の2013年度の行動計画の実績・評価、一番大きな枠ですね。その行動方針・内容を見ていただきますと、リニューアルに向けて新しいシステムの構築を検討をしていくということで、これは来館者が快適で楽しく情報を得られるような、そういったシステムをICTを使ってやっていきたいということで、今回、十分には説

明はできませんでしたが、この基本計画でシステムの基本方針を定めたところです。

来年度は、右端の一番下に書いていますけども、利用者と学芸員、フィールドと展示など、ICTを使ってつなぐことにより、交流を推進するシステムを検討するというところで、第1期の実施設計の中で具体化をしていきたいというように思っております。

次に5ページで、今度は環境の整備で、「拠点としての施設整備」ということになります。これにつきましては、2段目でIPMの推進というものがございます。これは総合的病害虫管理ということで、博物館はこうした病害虫の予防をしていく大切な資料を保存していくために、こうした病害虫を予防していくという、そうした不易の取り組みが必要になってきます。

2013年度の行動計画では、ちょっと具体的に書いていますが、目標値の中では、生物調査におけるチャタテムシの基準値を超えないということで、これは年に何回か生物調査を実施しておりますが、6月では実は民俗の一収蔵庫で基準値を超えましたが、10月、秋に実施して、その後改善をされて、基準値以下ということを現在保っております。こうした不易の取り組みもこの中長期基本計画の中には挙げられております。

次に、「柔軟な運営組織」ということで、一番下に専門スタッフの配置と組織体制の整備ということで、これも実はリニューアル絡みで、本年度必要なスタッフの配置というようなことを目標に掲げました。具体的には達成状況に書いておりますが、13のワーキングチームを結成して、学芸員・職員全員参加のもと、今回のこのリニューアルの基本計画案を作成したということになっておりますし、また施設整備では技術的な検討も必要になってきますので、技術職員の配置も行うことができました。

最後、6ページですが、「社会的支援と新しい経営」ということで、一番上の段ですけども、第3段階の活動計画で、広報・経営戦略（集客対策）の具体的な展開ということで、先ほど松江委員のほうからお話しがありました。

2013年度の行動計画の実績・評価の目標値では、この基本計画で琵琶湖博物館の広報用ツールとなる基本コンセプトなりキャッチコピーをつくっていくということで、今回、その骨子的な部分を基本計画では紹介をさせていただいております。この作成に当たっては、ここの自己評価に書いていますけども、広報アドバイザーであったり、あるいは旅行社なんかも訪問をして、いろんな意見を聞いて、こうしたコンセプトをつくってまいりました。

ただ、松江委員がおっしゃるように、まだまだちょっと不十分な状態です。今回、展示・交流空間にどうしても力を割いたということで、広報計画のほうが少し後回しになってしまいましたが、2014年度の行動計画の目標では、リニューアル広報計画を別途つくって行って、そこにはちょっと力を入れていきたいというように思っております。

時間の関係で簡単ではございますが、こうした実績・評価と来年度の行動計画になります。

以上でございます。

○市川会長：ありがとうございます。

それでは、議題（２）、琵琶湖博物館中長期基本計画2013年度行動計画の実績・評価および2014年度行動計画について、ご議論いただきたいと思います。

ご質問、ご意見等、どなたからでも結構ですので、よろしくお願いします。

○小田委員：1つよろしいでしょうか。

○市川会長：はい、どうぞ。

○小田委員：1つお聞きしたいことがございます。外部資金の導入など新規公開に向けた方策というところが2カ所ほど出てくるんですが、この外部資金の導入などの新規公開に向けた方策というのは、具体的には例えばどういうことをおっしゃっているのか、ちょっとお聞かせ願いたいんですが。

○篠原館長：展示に関する外部資金の導入ですね。

○小田委員：はい。

○篠原館長：これは今、いろんな企業が、環境、CSRをいっぱいやっていますよね。そういうところがリニューアルに向けて、CSRなんかを頑張っておられる会社、企業とネーミング・ライツなんかのことを含めて、展示に協力していただきたいということを申し出ようかなと思って、まだこれは希望だけで具体的に動いているわけではないんです。具体的に動いているというか、接触はそろそろ始めていて、そういうことが可能ならということで、幾つかこの近くで言うと、ダイフクさんという大きな会社がありますが、そういうところはCSRにすごく積極的なので、そういうところとか、あるいは京セラさんも一生懸命やっていますし、それから以前ここでタッチングプールのところでブリヂストンさんに少し協力願ったりしたことがありますけれども、そういうようなことを今度展示の中で可能な部分が何かを洗い出して、それで企業に持ちかけていこう

というふうなことを考えております。

具体的にこの企業とか、こうだとかいうことは、まだそこまではとてもっていないんですけれども、うまくいくかどうかはわかりませんが、接触をして、努力しようということを考えているわけです。

○事務局（八尋部長）：あと研究関係では、科学研究費補助金などの外部資金を積極的に獲得しようと組織的に進めています。科学研究費補助金、あるいはほかの研究助成など、合わせて20件以上を獲得しているといいます。これはもう組織的に進めていることで、先ほどの新しい博物館像の中でも外部資金はどんどん取っていこうということは考えております。

○小田委員：ありがとうございます。

○市川会長：ほか、何かございますか。

はい、どうぞ。

○菊池委員：私も今の部分に関してなんですけれども、組織予算自体はあくまでも現予算の中でということで、今回新たに附帯的に起こってくる部分に関して、具体的に寄附なのか、あるいは共同なのかという形で外部資金を調達するというイメージでよろしいのでしょうか。

○篠原館長：いや、基本的には県の予算でやります。その付加的な部分を一部、可能ならということです。

○菊池委員：協力してくれるところはということですか。

○篠原館長：はい。

○菊池委員：わかりました、ありがとうございます。

○市川会長：ほか、何かございますか。

うちの水族館、情報資料なんですけど、VHSのテープが山ほど放ったらかしになって、お手上げ状況になっているんですけど、こちらはきちんと整理して、VHSをCDかほかのものにおさめてとか、その辺はきちんとできているのでしょうか。

○事務局（戸田専門学芸員）：日常的な管理体制として、持っている映像資料、既に登録して管理している資料は既にデジタル化を済ませております。

ただ、いろいろ寄附で新しいものが入ってきたりして、その対応が、特にフィルムなんかも入ってくる場合がございますので、そういう部分はなかなか、その都度ちょっ

と外部資金を獲得しようと考えるとき、そういうふうな対応で少しずつ進めているところでは。

○市川会長：わかりました。

○篠原館長：これの外部資金は文化庁の助成金をもらって、一部使っています。

○市川会長：そうですか。

○篠原館長：要するに、文化庁の博物館を中心にした活性化事業みたいなものがあるんですね、助成金が。それを使って申請をして、その中で、ここにあるVHSをCD-ROM化するというのを進めていくと。一部ですけどね。全てではありませんけれども。

○市川会長：古いフィルムなんかはかなり劣化しているはずなんですけど、それなんかは…

…。

○篠原館長：それは今、戸田さん、わかるでしょう。

○事務局（戸田専門学芸員）：実は最近、どさっと入ってきたのがありまして、それを少しずつやっているところです。

○市川会長：はい、わかりました。

ほか、何かございますでしょうか。

○小田委員：もう一つ、よろしいでしょうか。

○市川会長：はい、どうぞ。

○小田委員：これもちょっとお聞きしたいんですけども、3ページの2013年度行動計画の中に、サテライト博物館を利用した学校・地域と連携活動の強化のところの自己評価のところ、いろいろな団体との協力をしたけども、「各団体ごとのゴールが異なるため、画一的な方針は立てにくかった」とあるんですけども、具体的にこれはどんな方針を立てようと思っていたけども、それぞれ団体ごとにゴールが違くと。この辺、ぜひお聞かせ願いたいんですけども。

○事務局（楠岡専門学芸員）：交流担当の楠岡と申します。サテライト博物館というのは、もともと小学校の空き教室をお借りしまして、そこに博物館の展示物を持って行って展示をします。ただ、今までの問題が2年ごとに小学校が変わったんですけど、小学校が変わると何も残らないというような問題がありまして、それで何とか地域の方々と一緒に連携して、それで次の学校に移っても、その地域の方々の活動拠点みたいなものができたらいいなというふうに考えてやっているんです。

やはり地域の方々と連携をするときに、今ですと、例えばシルバー人材センターと連携したりとか、地域の自治体の方と連携したりしているんですけど、やっぱりそれぞれ思惑が少しずつ違ってしまっていて、そこでいろいろ話し合いをして、それぞれの地域に合った形で運営していこうというふうにしております。

○市川会長：いいですか。

○小田委員：はい、ありがとうございます。

○市川会長：ほか、何か。もう1点ぐらいございませんか。

はい、どうぞ。

○津屋委員：ちょっと質問です。きょう、レストランのほうにちょっと行ってきましたら、すごい目を引くポスターがありまして、レストランを……。

○事務局（桑原所長） プレミアムレストラン。

○津屋委員：あっ、そうです、びっくりしました。コンサートを聞きながら、貸し切りで、8,000円のフルコースで、演奏を聞きながらということで、これは初めてでしょうか、どうなんでしょうか。物すごく目を引きましたね。

○事務局（桑原所長）：春のプレミアムレストランですね。これは今回、当館として初めて行う事業です。これまで3年間、「あさ、ひる、ばん 博物館を楽しもう！」というイベントをやってきましたんですけど、その流れの中で、来ていただくお客さんのターゲットを少し変えるという言い方したらちょっと語弊がありますけれども、ふだんなかなか来ていただけないお客さん方、具体的に言うと、二十歳以上の働き盛りの方が来ていただけるような働きかけをしていきたいと。その一環の中で今回、ちょっと8,000円と高いんですけど、豪華な形で、今回は水族館ですけども、夜、ちょっといっぱいだけですけど、食べて、飲みながら水族館を見ていただいて、ちょっと解説をつけて、博物館を見ながら、食事は滋賀県の琵琶湖の幸、山の幸をふんだんに取り入れて、演奏家は京都で活躍されている方なんですけども、雰囲気よく音楽を聞きながら、琵琶湖のものを食べて、琵琶湖博物館の雰囲気を楽しんでもらおうという、そういうイベントをちょっと計画しました。初めてのことなので、どのぐらいどうなのかというのはちょっとまだわからないんですけども、今のところ、14日、金曜日の申し込みがもうちょっと空きがあるんですけども、土曜日のほうはもういっぱいになっているという形で、どういふふうになるか、少し楽しみかなという感じで進めているところです。

- 津屋委員：初めての衝撃を受けました。ちょうどその2日間は東京に行っていて、とっても残念なんですけど。演奏を聞きながら、コンサートもあって、あそこに貸し切りと書いてありますよね。
- 事務局（桑原所長）：そうです。一応定員40名ということで、これはいろんな制限があって、なかなか無制限というわけにはいかないの、基本40名定員で、その方だけに楽しんでいただける形にしています。
- 津屋委員：「あさ、ひる、ばん 博物館を楽しもう！」も大ヒットでしたけど、多分こういうのはとてもプレミア感があって、これから目指す大人の博物館としては、とてもいいですね。
- 事務局：金曜日は、まだ空いていますよ。
- 津屋委員：金曜日……。
- 事務局（桑原所長）：その辺は今回は狙って見たところです。もしよろしければ、金曜日はまだ空いていますので、よろしくお願いします。
- 津屋委員：金曜日から東京で、すみません。ぜひ、また次回期待しております、反響がよければ。
- 事務局（桑原所長）：また、今後もちよっといろいろ考えていきたいと思います。
- 津屋委員：ありがとうございます。
- 市川会長：中長期計画の議題からは既に外れているわけですが……。 (笑い)
- 津屋委員：すみません。
- 市川会長：その他、委員の皆さんから特にご意見、ご発言、何かございますでしょうか。何でも構いません。
- はい、どうぞ。
- 前田さん、どうぞ。
- 前田委員：何でも構わないということなので、ちょっとお伺いしたいのですが。私はフィールドレポーター活動をする中で、長く活動してこられた方からこの前聞いた一言がグサッと突き刺さっています。年配の方なのですが、「琵琶湖博物館は南部にあるので、北部に住む者には恩恵が少ない」と。この意見に応える一言をお返ししてあげたいのですが、どうでしょうか。
- 市川会長：難しいですね。

○事務局（楠岡専門学芸員）：確かに実際問題として、どうしても活動が南のほうに偏りがちなんですけれど、観察会等を北のほうで積極的にやるとか、あとサテライト博物館、先ほどもちょっと申し上げましたけど、あれは基本的に、今のところ湖北地域の学校ばかりを回ると。それで、なかなか琵琶湖博物館まで来れないような学校の子どもたちとか、その地域の皆さんにも琵琶湖博物館のことを知っていただくきっかけづくりができればいいなというふうに思っております。

○前田委員：それは両方とも知っていることだったんですけど、そう伝えておきます。

○事務局（楠岡専門学芸員）：おっしゃるとおり、今後積極的に、どうやったら北の方々にも琵琶湖博物館と関係を持っていただけるかというのは、いろいろあの手この手としなきゃいけないなと思っております。

○市川会長：ありがとうございました。

3 その他

○市川会長：何でもありでもオーケーということで、あとお一人、ご意見ございますか。ありませんか。

それでは、時間もなくなってまいりましたので、本日の協議会はこのあたりで議論を終了したいと思います。

それでは、これをもちまして本日の議事を終了したいと思います。長時間にわたり、貴重なご意見をありがとうございました。

事務局に進行をお返しします。

4 閉会

○司会（中鹿副館長）：市川会長、長時間どうもありがとうございました。また、委員の皆様方におかれましても、長時間大変貴重なご意見をいただきまして、ありがとうございました。

春のプレミアムレストランの金曜日、残りわずかでございますので、お申し込みはお早目をお願いしたいと思います。どうぞよろしく申し上げます。

また、きょう、たくさん意見をいただきましたリニューアルにつきましても、基本計画を今月中にまとめまして、来年度からいよいよ実施設計ということでございます。具

体的な青写真を書いていくという段階に入りますので、また博物館協議会の場でもご議論いただきたいというふうに思っておりますので、引き続きよろしくお願ひしたいというふうに思います。

それでは、以上をもちまして、琵琶湖博物館協議会を閉会とさせていただきます。どうもありがとうございました。

[16時30分 閉会]